

夫婦間の溝、そして会話がなくなつていく夫と長男

## 私、どうすれば…？

田中 幸江さん  
(51歳)

頼れるのは夫だけなのに…。  
悲しくて涙がこぼれてきた

夫は仕事人間で週に1日しかない休日  
さえ仕事を考えているようでした。  
子どものことはすべて私に任せきりです。  
私たちには三人の男の子がいますが、高校  
生、中学生、小学校の高学年。難しい年ご  
ろなのに、夫は子どもと会話をすることも  
なく、私が一人で話をする日々でした。

田中幸江さんは結婚した当初は薬剤師として働いていたが、子育てが忙しくなると仕事を辞めた。  
実家が沖縄にある田中さんは実家を頼ることもできず、ご主人が唯一の頼りだった。



一人で沖縄から出てきて、頼れるのは夫だけなのに……。悲しくて涙がこぼれてきました。

“ママ友にも不満をぶつけてみたが、何の解決にもならなかつた。そして、孤独感と虚しさは、いつしか怒りへと変わつていつた。

夫の仕事が大変なのは分かつていましたが、それ以上に家族に対する無関心すぎる夫に私は腹が立ち、子どもたちの前でも平気で喧嘩をしました。

その上、長男に夫のことを言ってストレスを発散していたんです。そのせいで長男の父親像もゆがみ、私と同じように夫を責めるようになったのです。「お前が子どもに

夫婦関係はギスギスし、長男と父親も対立。気づくと家族がバラバラになつてもおかしくない状態だつた。

そんな家庭の空気を誰よりも敏感に感じていたのは小学生になつたばかりの3男だった。3男はだんだん学校に行くのを嫌がるようになつた。無理やり登校させたが、田中さんはいつしかそれが息子から

の無言の抵抗だつたと知ることになる。

## 学校の居心地が よくないのなら、 家の中にホツとできる 場所を



そこに気づくことができたのは導きの親である廣瀬裕香さん（46歳）と出会つたからだつた。

彼女はいつも親身になつて話を聞いてくれるので、ある日、子どもたちのことを話したんです。そのときに「一番下の子の僕にはホッとできる場所が必要なんじゃないのかな。学校が居心地がよくなつたんだつたら、家の中にホッとできる場所をつくつてあげるしかないんじゃない」と言われ、私は初めて自分の責任というものを感じました。

自分だけがつらいと思っていたけど、そうではなかつたのです。心を痛めていたのは一番小さな息子だつたんだと知つて、初めて私が家中を変えなければと気づいたんです。

俺の悪口を言わせてるんだろう」と、子どもを巻き込んで毎日夫婦喧嘩ばかりでした。

年下だけどいつも自分に厳しいことを言つてくれる廣瀬さんとの間には自然と信頼関係が生まれ、靈友会の話を聞いたときも、この人のやつていることならと思ったし、自分の手で自分の先祖が供養できるのならと入会を決めました。

つどいの中で「ご主人に感謝よ」と言われても、なかなかそれができないんです。感情の方が勝つてしまつたり、でも反省したりの繰り返しでした。

そんな田中さんを変えたのは、我が子の姿だった。



3人のお子さんと公園へ

去年、長男が廣瀬さんの娘さんの賀吏ちゃんに誘われて、初めて青年の弥勒山セミナーに参加したんです。私も担当者として参加しましたが、どんなことになるんだ

べたら、自分は甘えていたのかもしれない。お父さんと仲良くなれるように頑張つてみます」と。

実際、その日から長男は変わりました。自分から父親に「ありがとう」が言えるようになつてきて、親子の会話も増えていったんです。それから少しづつ夫の息子への接し方も変わつていき、私も今度は本気で夫への接し方をえていこうと努力しました。

るうと不安でいっぱいでした。

グループミーティングの時間のあと、長男がすごく明るく元気になっていて、何があつたんだろうと賀吏ちゃんに聞いてみました。

賀吏ちゃんが言うには、グループの中にいた一人の同年代の女の子が、やはり父親との関係に悩んでいたようです。そして、その子といろいろな話をした長男が、こんな発表をしたそうです。「みんなに比



ご主人と二人で

## 私が最初に変わろう

ある日、仕事から帰ってきたご主人がリビングで靈友会の月刊誌を見つけ、読んだ後、こう言つたという。「靈友会？ お前たちがやつてるのは知つてたけど、これはいいね。息子たちにももつとやらせた方が

田中さんは支部のつどいや弥勒山セミナーに参加するようになり、本気で家庭を変えたいと思うようになつていくのだが、それは簡単ではなかつた。

いいな」。そうポツリと呟く主人の言葉を聞いて、田中さんはこう思つた。

初めは靈友会のいいところが分かつてもられて良かったなど単純にそう思つただけでしたが、靈友会の良さも認めてくれる夫をあそこまで悪く思つていた自分は何だつたんだろうと考えると、夫の過去が蘇つてきました。

一人っ子で育つた夫は、父親が単身赴任で、母親も働きに出ていたので、いつも一人で家にいたそうです。そんな環境で育つたから、家族と関わることも苦手なのだと私は勝手にそう思つていました。

でもそうではなかつたんです。最初に変わらなければいけなかつたのは私自身だつ

たのだと、このとき心の底からそう思つたんです。今では主人も一緒に靈友会の行事に参加するようになりました。

ようやく変わりはじめた家族。田中さんは、今、こんなふうに思つている。

自分を変えるのって、自分の弱みを認めることだから、とても勇気のいることです。しかし、最初の一歩を踏み出さなければ何も変わらない。自分を変える勇気こそ、問題を乗り越える力。必ず現実は変えることができるのだということを、一人でも多くの人に伝えていきたいと今、思つています。

『あした21』2019年4月号から